# 「食」を通じてつながる地域の居場所
# ～ 子ども食堂の可能性を考える～

2024年2月28日(水)
於：関東農政局フードバンク活動促進のための交流会

Naofumi Shoji

# 自己紹介

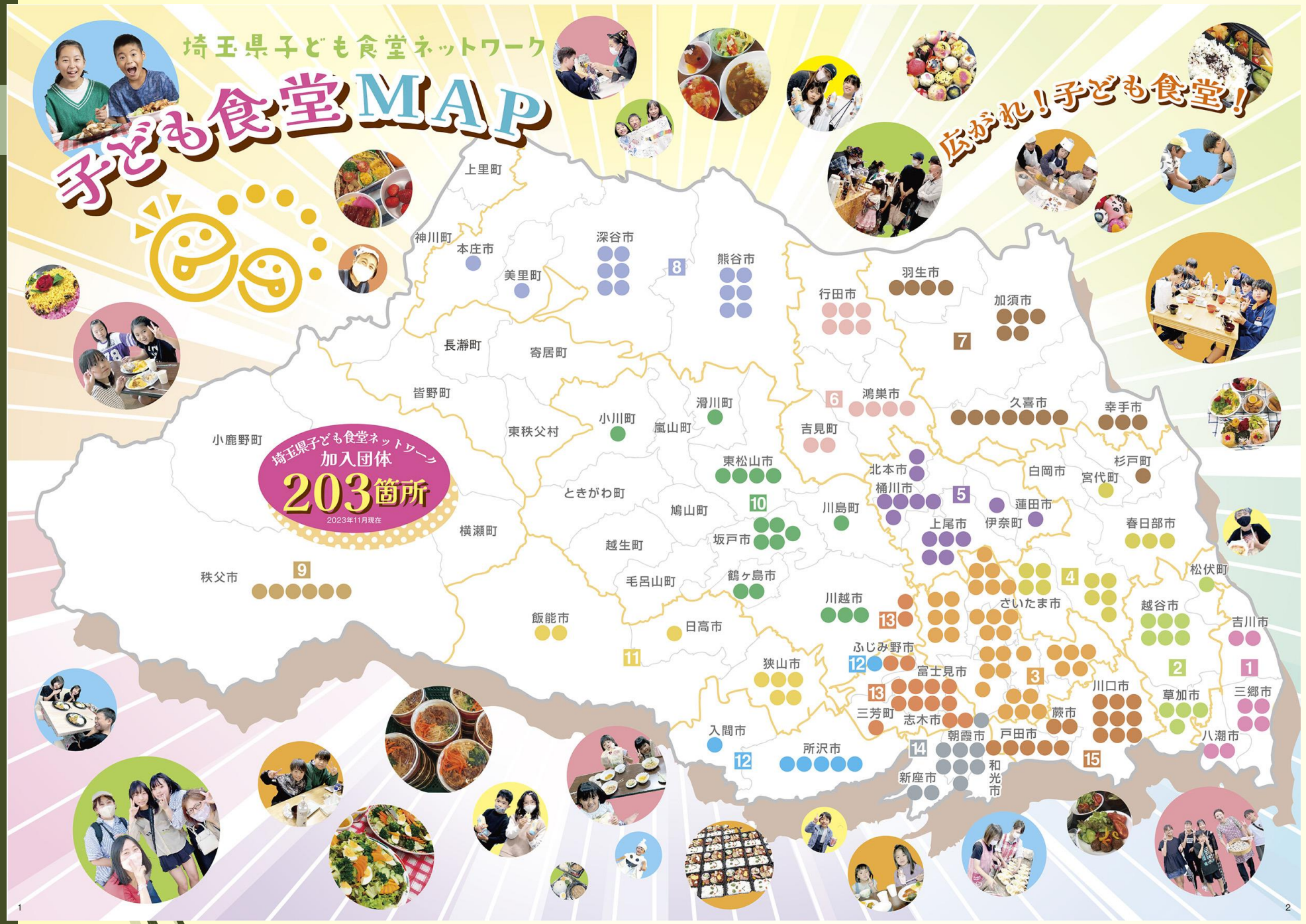
東海林　尚文

埼玉県子ども食堂ネットワーク　代表
埼玉県子どもの居場所作りアドバイザー
東入間コミュニティ食堂ネットワーク　代表
富士見子ども・若者の居場所応援ネットワーク　代表
富士見みんなでプロジェクト　代表
ふじみ野市音楽家協会　理事
コル・カント合同会社　代表社員

# 埼玉県子ども食堂ネットワーク

埼玉県全域を対象とする子ども食堂の運営者が
加盟するネットワーク団体。

企業・個人・行政・社会福祉協議会などと連携し、
各地の子ども食堂運営者をサポートしています。




2021年10月
**132**箇所

↓

2022年5月
**165**箇所

↓

2023年5月
**191**箇所

↓

2024年1月
**203**箇所

# 子ども食堂とは？

地域の大人が子どもに無料または低額で食事を提供する取り組み。2012年に東京都大田区で始まったとされ、その後、社会福祉法人やNPO法人、民間団体などの組織が全国各地で運営に取り組むようになった。貧困家庭の子どもへの支援に限らず、地域の交流の場としての役割を担っていることも多い。

# 「みんなで食べよう！」のようす

# ・フードバンクと子ども食堂

## ・フードバンク

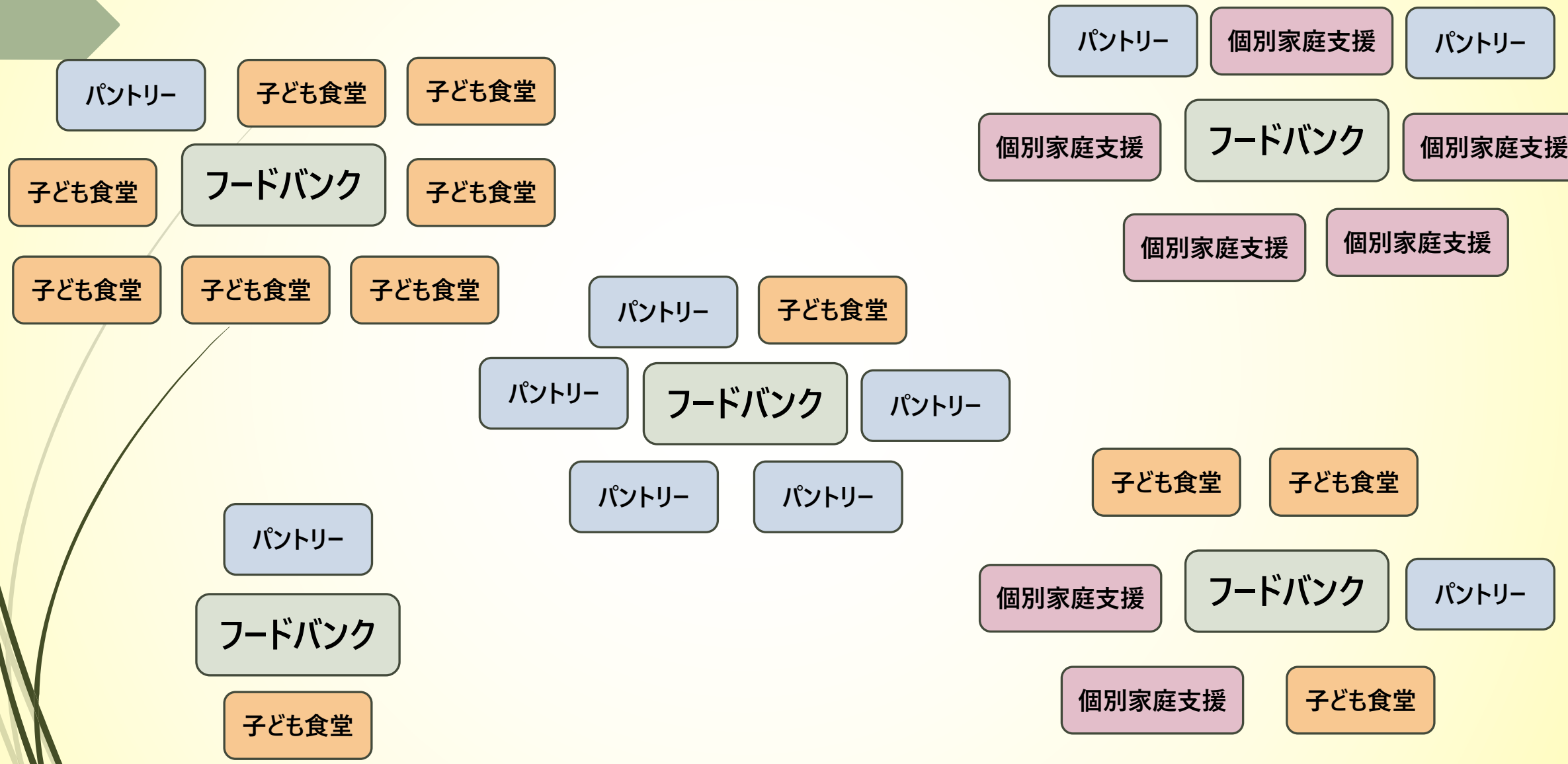
まだ食べられるのに捨てられてしまう食品を集め、困っている人たちに無料で提供する仕組み

## ・子ども食堂

食を通じた地域（個人）への支援活動

All Rights Reserved. Copyright khb

# 埼玉県でのフードバンク連携のイメージ



# 子供の貧困問題

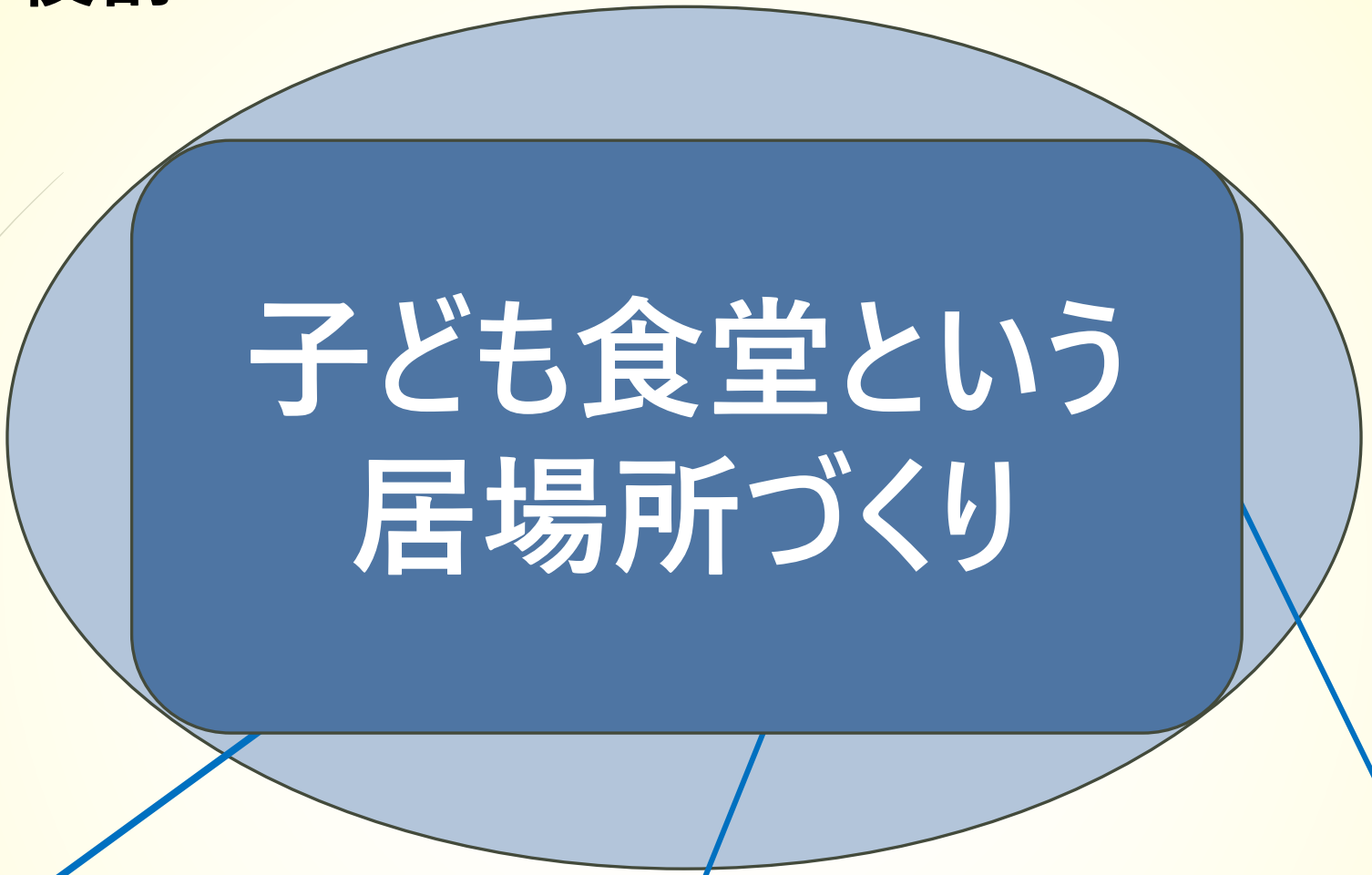
# 子ども食堂のイメージ

貧困家庭の子どもがご飯を食べに来るところ

親が夜働きに出て、一人でご飯を食べなくてはいけない子が来るところ

# 子供の貧困対策としての地域の居場所づくり

# ・子ども食堂の役割




子どもの貧困への支援
・経済的貧困
・つながりの貧困
・体験の貧困

子育て支援
・子育てママのレスパイト
・虐待の予防
・悩み事の相談支援

地域づくり
・無縁社会を断ち切るつながり
・地域住民の交流
・誰も取り残さない地域づくり

# ・子ども食堂の機能

家庭でも学校でもない

**第3の居場所**

## 「子供の居場所」とは?

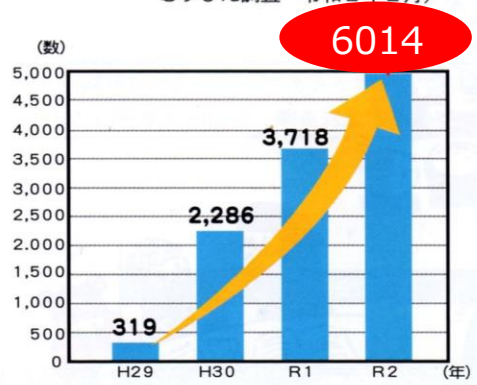
内閣府では、子供の居場所は「家でも学校でもなく居場所と思えるような場所」と定義しています。代表的な居場所としては、「子ども食堂」「無料塾」「プレイパーク」があげられます。

子供たちは、地域の人々に支えられることで、「自分は皆から愛される大切な存在なのだ」という自己肯定感を得て、「生きる力」「がんばる力」を得ることができます。

子供の居場所は、子供たちが１人で歩いて来られる距離にあるのが理想です。現在、県内には377か所の子供の居場所があります（令和２年８月31日現在）。県では、これを小学校区に１つの割合、800か所まで増やしたいと考えています。

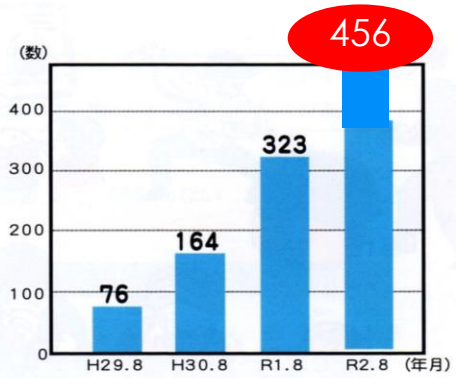
**●全国の子ども食堂**

（ＮＰＯ法人全国こども食堂支援センター・むすびえ調査　令和２年２月）




**●埼玉県の子供の居場所**

（埼玉県「子供の居場所」実態調査　令和２年８月）

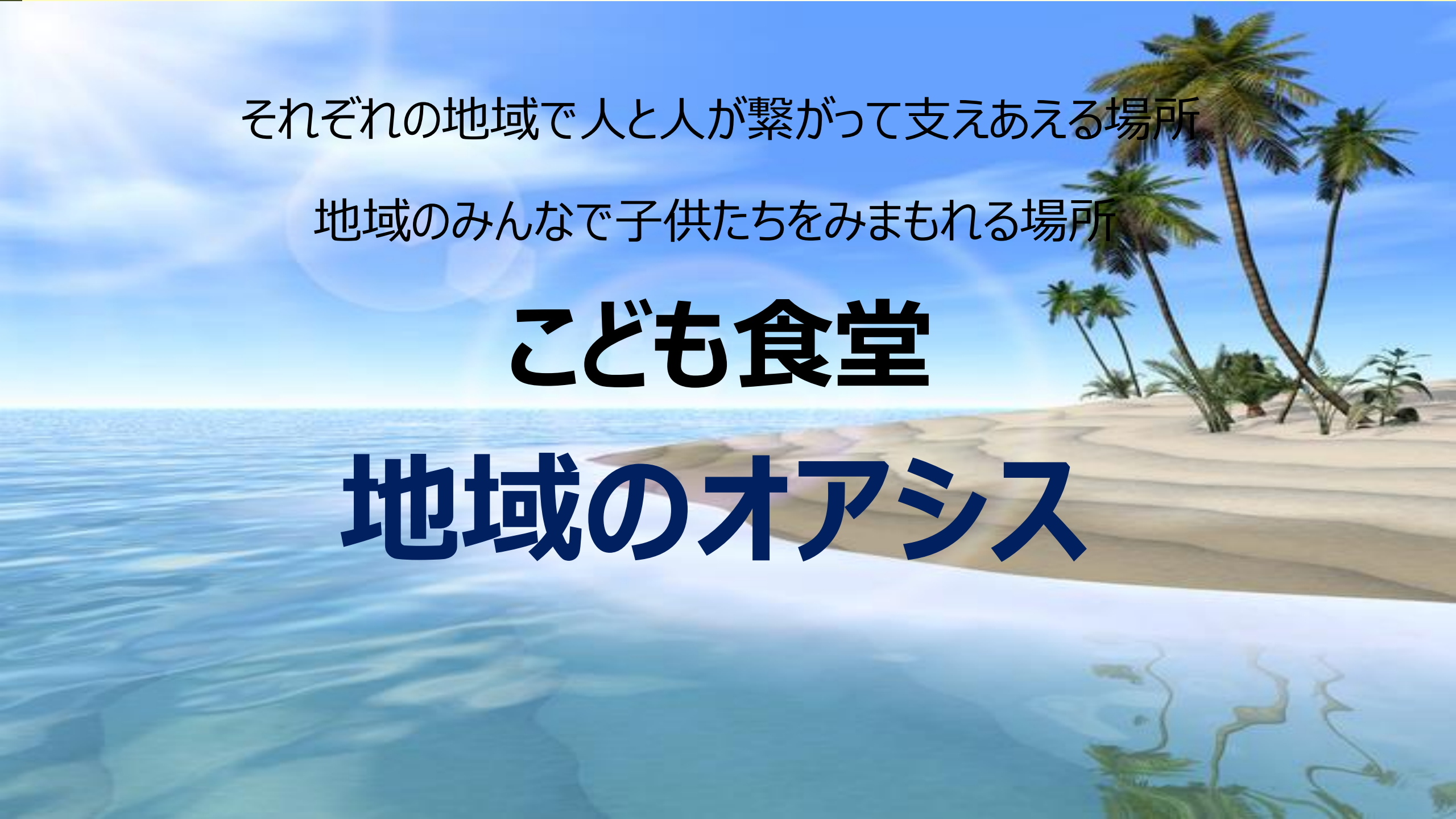



**●県内377か所の子供の居場所を800か所に**

# 埼玉県の目標

↓

埼玉県
全小学校区
**800**か所


それぞれの地域で人と人が繋がって支えあえる場所
地域のみんなで子供たちをみまもれる場所
こども食堂
地域のオアシス

# 熊谷市で「フードドライブ」活動広がる　小中学校、幼稚園でも

熊谷経済新聞 2022.9.16

これまでに開催した学校や幼稚園。

20校

上段左から
富士見中、
三尻小、
太田小（昨年度妻沼小）、
中条小、
男沼小、
星宮小、
長井小、
妻沼南小、
熊谷西小、
別府小、
石原小、
佐谷田小、
桜木小、
熊谷南小、
立正幼稚園、
大幡小の校長先生。
この他に秦小、吉岡小、奈良小でも実施。
今後予定している学校も。

# 企業との連携
## （ピックルスコーポレーション様）

・野菜の収穫体験
・キムチづくり体験
・みんなで食べよう！

福祉新聞　2019.8.1

# 学生らが運営する子ども食堂
# 多世代が楽しく交流（埼玉）

学生主体のボランティアグループによる子ども食堂「ひこうき雲」が２１日、埼玉県の筑波大付属坂戸高校で開かれた。子どもたちは高校生や大学生らと一緒に昼食を作って食べたり、鬼ごっこやキャッチボールをして遊んだり、元気いっぱいに過ごした。

お兄さんたちと一緒にポテトサラダに入れるきゅうりをスライス

ひこうき雲は、学校でも家庭でもない子どもの居場所をつくろうと、２０１７年８月に始まった。活動は月１回。誰でも参加できる。子どもも学生も地域の人も、普段関わりのない多世代が交流し、それぞれに良い刺激を受けて学びの機会にもなっている。

会場は同校が無償で提供。食材の大半は地域の人や農家から譲ってもらい、それに合ったメニューを考えている。運営は学生が中心になる。代表の河野和さん（大学４年）は「年の離れた人がつながる環境があることは大切。子どもとは対等に関わるよう心掛けている」と話す。